

ずいそう

♨ イタリア温泉探し ♨

佐々松 音



駐在時代、イタリアに日本と同じような温泉が有るかという疑問を晴らすため、イタリア北部地図の温泉マークを参考に、海パン・手ぬぐい・タオルを手に4回も挑戦したが、ただの湧水やぬるい湧水であったり、熱いお湯であっても湯量が少なかったり、鼻、喉の治療場や美容の泥風呂であったりし、残念ながら、かけ流し・大風呂の光景を目にする事は出来なかった。

無念をはらすべく、イタリア人への聞き込みを開始、その結果、間違いなくプール（イタリア人曰く）がある温泉情報を入手、疑う訳ではないがネットで詳細調査。町の名前は「Acqui Terme」と言い、日本語訳は「温泉」町、紹介HPには「古代ローマ時代から温泉が湧き、大浴場と打たせ湯などの温泉施設に加え付属ホテルがある」との記載、風呂場の写真も記載されている。トリノからは約100km、これは期待できそう。

<道中>

3連休のせいか、いつもはガラガラな高速道路が混んでいる。嫌な予感をもちつつ「Asti」で一般道に下りると、突然、大渋滞に巻き込まれる。イタリアで良くある事故渋滞？ 牛歩の如きの動きで約30分走るとやっと「Acqui Terme」と「Alba」への分岐点に出た。

分岐点には布に「← Tartufi」「Alba」の手描き文字、世界三大珍味のひとつ「トリュフ祭り」のための混雑であった。不思議なことに、短気なイタリア人も目的のある、理解できる混雑はあきらめているようだ。

<朝食+ワイン>

この「Asti」地域はイタリア最高級ワイン「Barolo」「Barbaresco」町の近郊にあり、広大な丘陵地帯のほとんどの植え付けられた葡萄の緑が目優しい。

毎月のように買い付けに行っているワイナリーに車を止め、朝食を兼ねサラミとパンをつまみにワインを試飲、購入後、温泉に向かう。

<入浴への遠き道のり>

「Acqui Terme」の中心部には温泉モニュメントがあり、中央部分から約40度の温泉が勢よく湧きだし、かすかな硫黄の香りとともに湯気が漂う。また、この温泉は飲用としても使われており、汲みに来た人たちの井戸端会議が始まっている。彼らは「この水で作る料理やコーヒーはとても美味しい」と話していた。

少し歩くと古びた温泉施設にたどり着く。

フロントデスク（番台？）に行き、「大きな湯船に入りたい」と話すと、「診断書・カードは？」の質問、何とここは治療用温泉（湯治場）？

「グルでは？」と疑いたくなるように温泉の目の前

に病院があり「お風呂に入りたいんですけど？」と質問。渡された書類に住所、氏名、生年月日などを書き込み、パスポートとイタリア住民票を提示、やっと診察券が出来上がり医師の部屋に。

医師の質問はイタリア語+医学用語で良く判らない。身振り手振りで何とか答え、診断書が出来、支払いを済ませ、パスカードを手に入れることができた。

出来上がったパスは年間パスであり、好きな時にチェックのみで温泉を満喫できると説明された。

片道1時間半かけて、これから何回来るのか？ 減価償却できるのか？ 暗算を試みる。

<イタリアの温泉の入り方？>

パスで入場し、指示された通路を早足で急ぐ。通路横にはバスタブとベッドを備えた4畳ほどの個室が続く、辺りには薬草・泥の香りが漂い、小太りの水着姿のエスティシャンと共にいかがわしさも感じる。

脱衣場に着いた。欧米では風呂の定番である海パンに着替え、硫黄の香りに導かれ大浴場に向かう。

温泉入口で「効能と入り方」の説明が始まった。治療目的であり仕方ない。まずはぬるま湯に浸かり、次は冷水に浸かる、これを3回繰り返し、血液の循環を良くしてからやっと温泉にたどり着ける。面倒くさい。

風呂はと言うと、もちろん石造りで、座ると肩までの日本的大浴槽、立湯（昔の女工風呂？）と打たせ湯が有り、源泉？ かけ流し？ で快適。

洗い場が無く、海水パンツで混浴という違和感はあるが、久しぶりの温泉、広い湯船であり、持参の手拭いを頭にどっぷりと湯に浸る。「あ〜」と言う声とともに成分が肌にしみこみ、「いい戸〜湯だな〜♪」

<入浴時間制限>

約20分温まった頃、突然のホイッスル。上半身裸のオヤジ（治療医師？）が身振り手振りで「出る」の指示。一緒に浸かっていた女性が「長湯は体に悪いの」「入浴時間制限があるのよ」「あなたのパスに書いてある処方箋通りよ」と通訳してくれた。

<湯上りの一杯>

超気持ち良かった温泉に後ろ髪をひかれながら、持参のタオルで体をくるみ、パールに直行、冷たいビールが潤いた喉と火照った体に流れ込む。残ったビールを持って休憩の竹製ベッドでクーリング。

湯治場でビールが飲める？ って、とっても幸せ（^.^）だが、ところで、帰りの運転は誰が？